

現場や地域の草の根の環境取組のリーダーとして活躍する道を開くような社会的な仕組みを設けることが重要となります。

第2節 人口の地域偏在と環境

1 里地里山地域

人間と自然のかかわりあいを作り出してきた里地里山は、奥山自然地域と都市地域の間位置し、日本の国土の約4割を占めています。この地域では、里山の中核をなす二次林とともに、人工林、水田等の農地、ため池、草地等がモザイク状に組み合わせられ、人為による適度な攪乱によって里地里山特有の環境が形成維持され、絶滅危惧種を含む多様な生物を育む地域となっています（図1-2-1）。また、里地里山は「第一次産業の場」であると同時に、都市近郊においては都市住民の身近な自然とのふれあいの場、環境学習のフィールドとしての重要性が高まっています（図1-2-2）。

図1-2-1 里地里山地域と希少種の分布域と重複関係

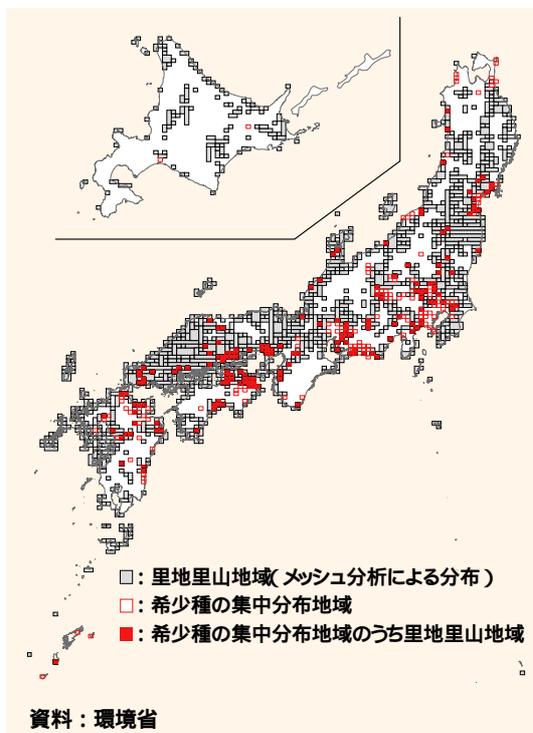
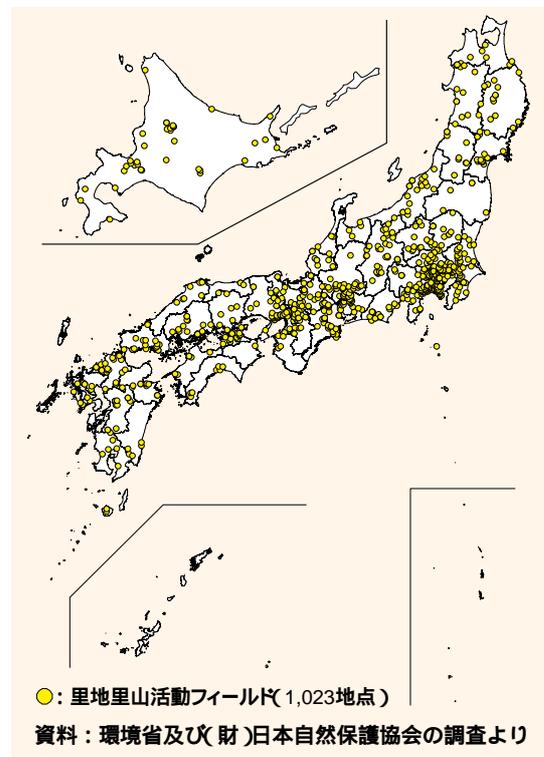


図1-2-2 ふれあい活動団体分布図



(1) 里地里山地域の現状

ア 過疎化の進展

地方部に位置する里地里山地域等では過疎化が急激に進展しています。過疎化の要因としては、近年、人の移動による人口の社会減が縮小してきた一方、出生数の低下、死亡数の増加による人口の自然減が拡大傾向にあり、社会減と同水準にまで達しています（図1-2-3）。過疎化が進む地域では、集落消滅の可能性も指摘されており、「過疎対策の現況」（平成17年7月総務省）によると、過疎地域にある約49,000の集落のうち、約10%が集落機能を維持することが困難になっています。また、平成11年に国土庁が実施した過疎地域の市町村（当時1,230市町村）へのアンケート調査によると、全集落（当時48,689集落）のうち、2,109集落に消滅の可能性があります。

イ 農林業活動の停滞

里地里山では、農山村に定住してきた人々が農業及び林業を通じて、自然と対立する形ではなく順応する形で自然に働きかけ、うまく利用することによって、多様な生物を育むことのできる環境が形成され、